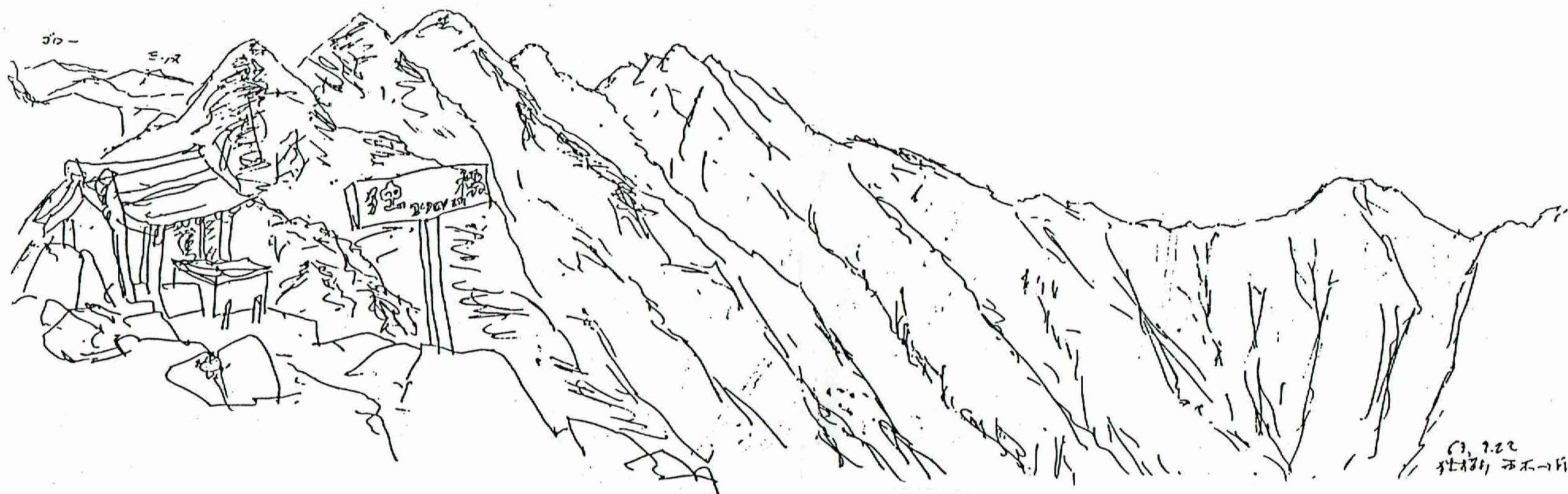
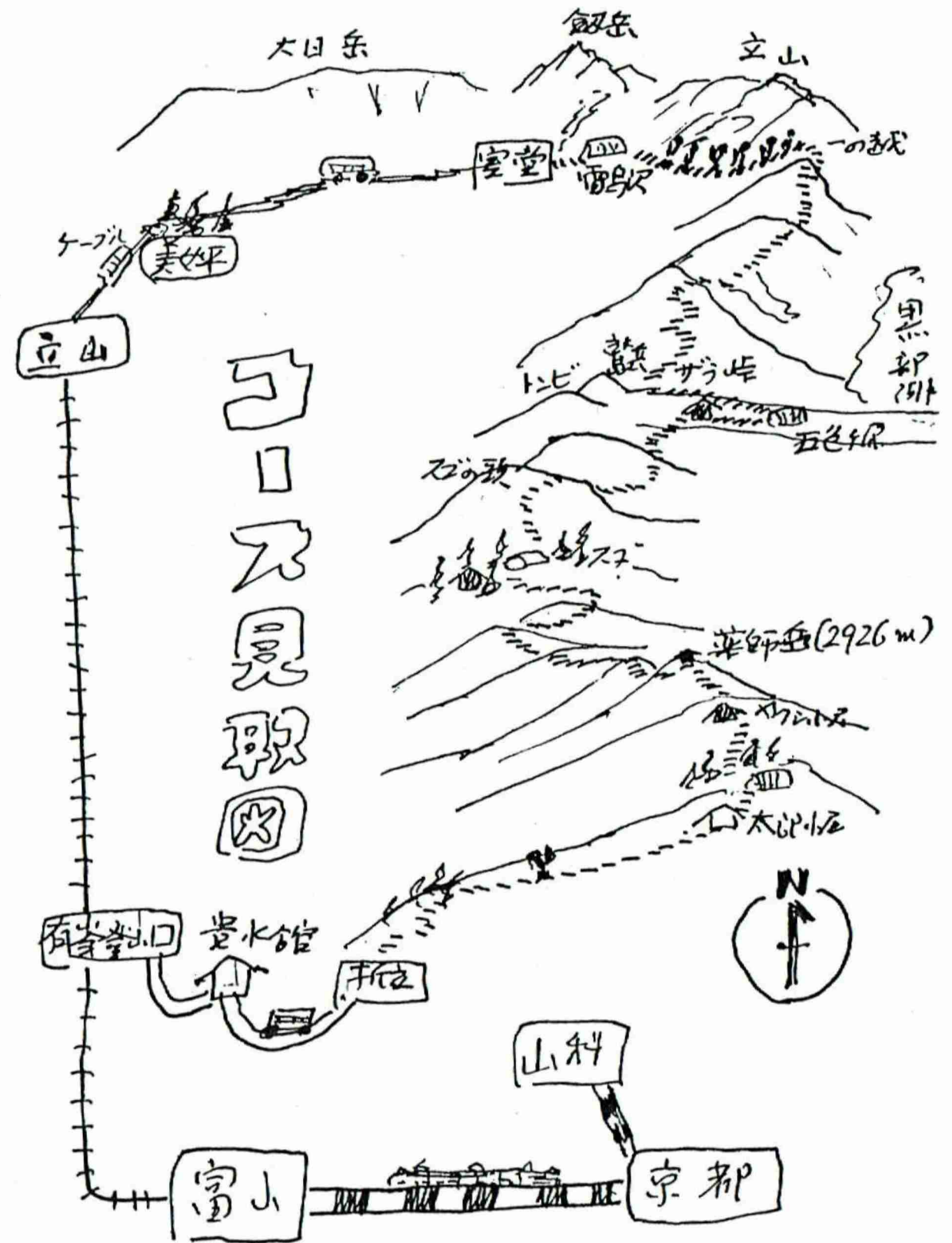


'88 ワンゲル  
薬師岳



穂高連峰

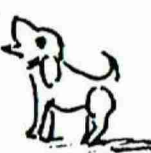
山にとりつく迄



去年の夏山が たった三人になつた爲の危機感で 秋に学生をつれて比良での一泊をしたが 四月の新入生にも出来るだけの手を打った。例年通りの講義での宣伝だけでなく 入学の書類に興味登山と書いてある男を各々一人ずつを呼び出して勧誘した。これだけでは決め手になり難かつたが 毎週火曜と水曜に田中君とマキノの駅かう一所になつたが 田中君にはプレッシャーになつたかも知れり。田中君の先輩の松本君(二人とも同社の心理を卒業してゐる)も入部してくれると嵐山の新生歓迎会で聞かされる。その他にも昨年来の榎本君、土佐君達の働きで一年の力又一部の木村君、三年の沢口君が加わり、一年で呼び出した小西さんも入つてくれる事になり一先づ胸を撫で下ろした。

夏山のプランも改造直後の自宅へメンバーを集めての立案。榎本君が力又一部の都合で不参加なのがつても残念で前からの願ふれば竹下君だけとあつては僕が付いて行つてそれなりにリードしなければならぬ。自分の脚力、年齢で参加したためう賛決は許されなくなつた。唯老人と素人のパーティでは無難なコースにしなければならず、五色山薬師山太郎と言うおとなしいコースに落ちつく。このコースに印象が要い。君が不参加になつたのも、榎本君とともに悔しが残つた。このコースでの難関は勿論薬師岳だが、それ迄のコースでも僕にとって楽しい記憶が残り、跡地原一の登山五色のシンドさは度々身にしみているが、僕の大好きな霊峰薬師へのアプローチもシンドくて長いといった物しかなく、せめての彩りは五色ヶ原の花畑しかない。唯打ち上げの亀谷峠は、六車君がリリーダーの時の印象で決めておいた。何れにせよ、とにかく歩いてみなければといつた所だろう。





8月7日



6時すぎに起きる。朝食をすませて家を出たのが7時10分。ザックを自転車に運ぶ女房が追いついてきて電話があったとの事。松本君が発車時刻に間に合わないとの連絡を。娘の由紀子が聞いたと言うのである。去年の再現かと(去年は三人バラくど富山に着いた)ドキとしたが、今年も総勢六人なんだから……と、とにかく山科駅へ。7時31分の電車に乗る。京都発7時55分の雷鳥一号に乗り込む。松本君以外の全員が揃い、やかてトランプ(ドヒン)が始まる。フンゲルの伝統のドヒンはとにかく伝えられたようである。9時40分頃土佐君がド貧民でトランプを切っているカードが床に落ち、その内の一枚がシートかヒータの陰でどうしても取れない。残りのカードを調べるとハートの8がない。余分のカードで代用してドヒン続行。そのカードをラッキーカードと言ったりする。



また整備関係をしやべつしているとポリタンを持っていないのが多いのにびっくり。1と以下の水筒では不安なので、富小での購入を指示。(今迄の山なれしたメンバーでは考えられない事だ。可成りびっくりした)富小着11時2分。去年は竹下君が雷鳥一号で先着して我々を待ったんだが、今年は我々5人が松本君を待つ事になる。学生にはポリタン・日焼け止め・塩飴の四つ物に行かせ、自分は今夜のテント用



のワインを買いに、駅の上のデパート風の青島へ行く。由紀子へのおみやげも早々と買っておく。

11時4分に松本君が現れる。全員揃った所で、駅の上の食堂へ、学生達は殆んど焼肉

定食。僕自身は何だっけと忘れたが、箸は例によって合宿中の唯一の武器(食器)として4ヨッキの胸のポケットへさす。

0時34分発の富山地鉄道にのる。何回となく乗ったこの電車には今更何の感慨もな。初めて立山へ行った時のようにキョロキョロと車窓の外へ目を走らせる事、他の方ばかり行っていて少し御無沙汰した後での懐かしさ、こんな物から卒業してしまつたのかも知れない。約一時同の車内は雑談とトランプで過ごした。土佐君はヒルネ。田中君はビデオとりだしたと思ふ。1時40分には立山駅に着く。ケイブルが2時の出発。10分まで美々平へ。

バスの荷物者の計算で、僕のザックが10kgすれすれで、(10kg以上が有料)学生の差は又つたが大体14kg位。昔のフンゲルなら520kg以上かつげたのにと一寸寂しい気がする。僕の若い頃は25kgが当たり前だったんだから……2時20分にバスが出る。荷物は一台目のバスに入り、我々は二台目で可成り空いていた。昔歩いた道には矢張りこのジグザグで……と思いついて出していたが、今年もガスが可成り濃い。でも去年よりは少しマシだが、鉄崎山、大日連峯はガスの中だった。弘法小屋跡を過ぎ、追分小屋跡の近く(……)が弥陀、原のバス停。此所で





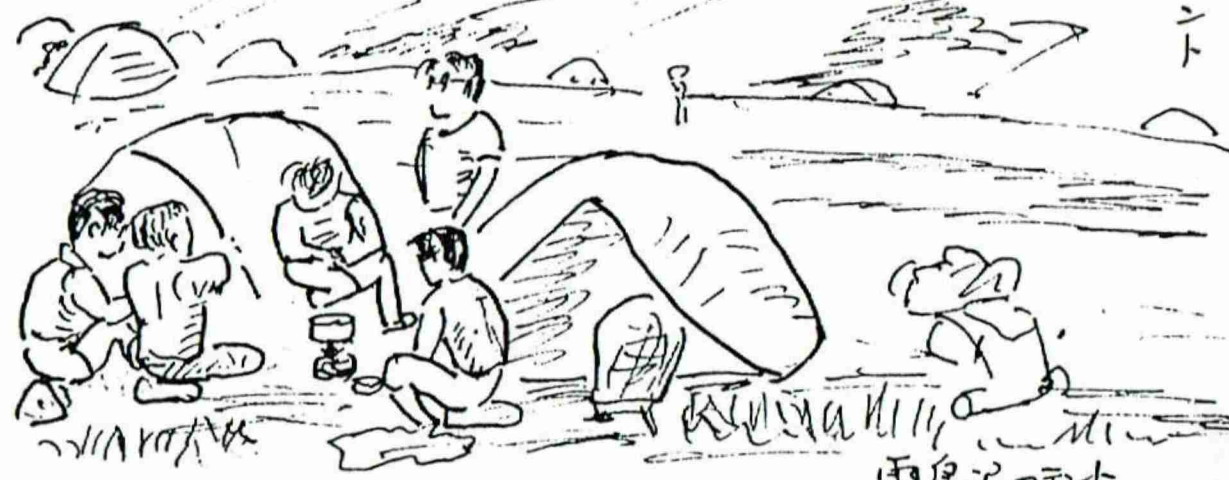


少し休んでからバスは天狗平へと上る。この上りぞスキをかついで上るのはしんどかったなあ。とか、その後の家族登山での天狗一泊を思い出したりした。天狗から残雪の所を大きくカーブすると、もう室堂ターミナルである。(3時10分着) 何時来ても寒むくて人が多すぎる所だ。去年(そういえばそれもまだ)と同じ陽ッコで、着替えをする。郵便局へ行くと言う学生に少し待たされてから3時24分に出発。ガスが去年よりはましだが、目の前の立山連峰も裾だけしか見えないう。灰色の空の下をゴロくと大勢の人が散策しているのを越えてみくり池へ。雷鳥谷を由(右廻り)で行くが、地獄谷を由(左廻り)で行くのを、学生にたづねてもハッキリしないう。事のないうままに、やはり(例年通り)地獄谷への石段の道を下った。昔、田中先生(先輩)を迎えに上る時、小屋の主人から地獄谷へ天狗のガイドを頼まれた事をフツと思ひ出した。昔は道が少なかったから自信満々だった。が、今のうちに散策の道が沢山のつけられていると、案内出来るかなと思ひたりする。硫黄の臭いのきつい地獄谷にあり、塩煙の所で記念撮影。房泊の古い小屋の残骸を見ながら昔話を田中君が松本君に聞かせながら通り抜ける。テント場に着いたのが4時10分。強んどメンバーとしては初めてなので、テントを張る。メシまでいって、次々と命令もし、少しは手伝う。パーティとしてのまとまりと馴れが出てくると、ほうほうでもスムーズに運ぶんだが、見ていると何もしないうでボカシとする人間が出てくる。ブスを出せ、喉をみて自分



のザックからシラフ(寝袋)を出しておけ。リーダー、テントわりは... これからこの人達とつき合って行くのは一寸大変かなと、その時は思った。(杞憂だった) 初日の夕食は、例年の如くハンバーグ・キャベツ・マヨネーズ。此所で塩のかわりに、富士で買った塩のゴマシオを落しているのに、竹下君が気がつく。下山後に、ビデオを見ると、キャベツを食べたら昔僕が8月の映画機を運転した話をしていたようである。夕方に石と可成り晴れ上って、立山連峰(破山、大汝、富士の折立)が段々に全容をあらわし、写真と前部の沢口君、カメラとビデオの田中君は、しまりとシャッターを叩いていた。(次の頁に画をのせておく)

雷鳥小屋 沢口君には、この夕方から夜にかけて三つの災難があった。その一は、ホエーブスの点火で、髪を毛をこがし、登山道前に床屋で手入れをしてきたばかりだった。二は、その二は、夕食の時、お尻の下に敷いた新聞紙が、水気を吸い上げてズボンがぬれたこと。三は、ズボンがフリンジに汚れたこと。ズボンがフリンジに汚れたこと。



雷鳥沢のテント





事である。テントの内でローソクの火を囲んで、ワイン・トランプ、ねる前に、小屋のトイレへ。ガスが晴れたのか、星がきれいだった。就寝9時40分。テントは4人と2人に分かれ、僕は土佐君とねる。0時頃、お苦しくて目がさめ、昨秋比良で、苦しかった事の再現かと思っただけ(原因は後で分る)大したことなく寝てしまう。唯、咳を度々して土佐君を心配させたようだ。

8月8日

5時に起きる。5時40分の朝会。パツクの白飯、インスタント味噌汁、ゆづり。ソーセイジ・ココアである。寒い尾根のテント場ではないので、朝会準備中からテントの撤収、各自のザツクのまとめを指示。昨日の夕方の全員の不馴れを見ていたので、今の内に寝ておこうと言う訳である。性急な僕の口出した効果で、6時30分には出立していた。テントをたたんで起床後一時内半後の出発は上出来と思う。少しカスッてはいるが、朝日もさし去年に比べれば抜群の天気。でも一越への上りは何回来てもバテているので、気分的には足が重い。オーダーは土佐君、松本君、田中君、僕、沢口君、竹下君の順である。途中で沢の渡渉の難しい所にぶつかると、仲々足をぬらすずに渡れそうなのがい(無理して渡すに、沢沿いに進めばよかったのが後で分った)とにかく渡渉。それから正面の台地へと登る。その内に道



が怪しくなり、偵察を左右に出しても、ハッキリした道がない。結局は今上った所を降りなければならぬ。可成の傾斜で下りは足許が不安である。やうと川沿いの所をおりて、折角30分位早く出発したんだが、此所での口スは...一時間位だったか? スタートでつづきは、気分的にたまらないが、コンクリートのトンネルみたいな所へ来ると、もう室堂が近くに見えていた。大分方向が狂ったようである。(室堂だと反対方向)またもな道へ出たのが、8時30分。室堂は、一の越の石を敷きつめた道。そろそろと大勢の人が歩いていて、僕は遅れはじめた。

9時7分に一の越直下のしめつぼに到着。初めてアルプスにきて、(40年ぶりに昔)赤之内君と歩いた時の事をふっと思ひ出す。これから一の越へも何時来てもシンドク上りなので、マイペースで歩いていけると、学生が迎えてくれる。一の越に着いたのが、9時25分。去年は、これからの雄山への上りで、完全にバテたので、今年の浄土山・竜王・鬼と続くコース(今迄何回通ってもシンドクだった)を、急に病んでいた。浄土山を上りきったのが10時10分。竜王系(二八七二米)への道で、五色ヶ原から帰る途中のO.B.里井君に会う。久々に里井君の顔をみるのは嬉しい。里井君は今年の全宿のコースを聞き、竹下君に「お前、それだけやせた」





10時55分、鬼ヶ岳、手前の雪渓にかゝる。昔は落ちそうだが、こわ  
 いトラバースだった。最近では鉄の棒とザイルで柵が作られてあま  
 足場もちやんと切つてあまの普通の不安はない。然し先刻  
 すれ違った果井君がトラバースの柵がこわれてますと一言い  
 たら、雪がとけて柵が倒れていたり足場が抜けて穴に  
 落ちていたり、少し緊張する。たしか土佐君が滑ってザ  
 イルを叩んで止まったとどう。(上の山)  
 雪渓の長ったトラバース二ヶ所、鬼ヶ岳  
 (ニセ五郎)に取っついて巻きにのこる。  
 里部湖はもうそれ以前から見えて  
 いたし、今日のゴール五色ヶ原も見え  
 ていた。11時55分、0時40分昼食。ビス  
 ケツ、ポト3枚、6Pチズ、サウミ2、飲  
 物はホカリスウツト。おまけにソーセ  
 ージもある。獅子ヶ岳(2714m)を越えようともうザラ峠への下  
 リである。今日の残りのコースは上りは殆んどないう安  
 心感がある。今日のバテ具合で、明後日のヤクシホへの上り  
 を皆と一所に歩けるか?と不安であった。五色ヶ原まで分  
 れて下界での移動で下山を迫る。何通りかのエスケ  
 ーフントを考えた。



1時20分にはザラ峠へ下り切る。これ  
 から五色ヶ原への僅かな上りが疲れの  
 にまつた時なので結構シンドイ。地図も  
 見ないので五色ヶ原ヒュッテを五色ヶ原山  
 荘と間違えて挨拶に行く。(1時50分)  
 皆でテント場へ行くのを止めて、一人で  
 五色ヶ原山荘への道を歩きかけたが  
 しんどいのでアイサツは今日の夕方の  
 明朝にすることに。平坦な下りだが長  
 く感じられる道でテント場へ。(2時20分)  
 テント場へついで休憩しようとする中  
 に「まづテントを張れ」の命令。自分自  
 身疲れが来ていて動きが鈍い。夕立に  
 も会った。雨の降る。テントと炊事の用意  
 は急いで済ませなければいけない。  
 今日のバテ具合で今後への自信がないので  
 つい「五色ヶ原、僕一人おろすから」と口をすべらし、演説会を固断に控え  
 た田中君が「一所におろすから」と言い出し、ハッとする。今をもち余中で  
 やめると言え、バーテンの氣勢をそいで、こうした発言は……と気が付く。









が速く痛い。肉の厚い所だし、何所もこわれてはいないようである。  
 先生「大丈夫ですか？」と殆んど全員の声がか、った所をみると、傍目にも派  
 手なところびようだったのか、かも知れない。別にやせがマンでもなく（スネと打った  
 時のように）動けなくなる程の痛みはなかった。直、立上り、大丈夫と歩き出  
 していった。右モモは可成りの出血をうけては思っていた。  
 11時35分にスゴの頭（二四三米）のピークは横をまくと  
 田中君が言っていたし、僕の記憶が越中沢岳と混同してはいない。  
 必は下をまわつても、殆んど頂上近くを上らせられ、いさ  
 さかバテる。此所では、昼食、セーカッセンベイ2枚、クロ  
 サンド（ビスケット）1枚、サラミ2、カローリメイト、  
 0時10分迄のんびりする。  
 此所からの下りもトンビ、越中沢岳と同様に可成り長い。  
 スゴが低い所だから仕方がないが、明日は今失なっている標  
 高を100%以上とり返さなくてはならぬ。下り切ったスゴ東越  
 が0時50分。これからの上りは昨日の五色ヶ原同様、長く  
 てシンドカ。タが、昨日程はバテていなかった。でも、もう少し  
 もう少しと目の前の針葉樹の林を見下ろすの一歩をまたいだ。  
 テント場到着。1時50分。  
 昔はもっと樹が多かったと思うが、風に煽められて形の  
 いい針葉樹の疎林の中の泥の多いテント場である。小屋  
 へ往復した松本君が足を泥につこんだらしく、しきり  
 と小屋への道の悪さを口にしていった。



スゴテント場から見た後立山連峰

る。それに気が付いた沢口君が  
 食は牛丼、明朝はおジャとの事

三日目ともなると、殆んど命令なしで、テン  
 トも張り、水場（水の出が悪）でお米もとま  
 その後、ゆつくりダベる。  
 夕食はカレー、色々のレトルト・パックが  
 あり、竹下君は、フンドボテ、土佐君ヤ  
 ングジャワ、沢口君（黒）松本君（10倍）田中  
 君（5倍）久保（ボンカレー）、カレの他に  
 ポタージュ、野菜クリームスープのどっちかを  
 壁で飲む。明朝の飯を炊いている途中で  
 ガス欠。ガソリンを入れて炊き直す。夕方  
 岩つばめが沢山飛んでいった。  
 コツフェルを洗っている時だったと思うが  
 沢口君が水場で他のパーティ（五月山学院？）  
 の女の子と長々としゃべっていた。水の出  
 がよくないので、時間がのびていた。水の出  
 いとは、言え、御二人を眺めている我々の話  
 は、沢口君とその女の子のパーティ（感心）の悪  
 い男が含まれた女の子の多しパーティをター  
 トにして、山の中、御二人のムードで、おしゃべりが  
 はずみ、田中君が、御二人をビデオに収め  
 飛ぶように帰ってきて、向うのパーティの夕



8時30分にぬる。僕のテントに誰かねたのか覚えていない。ローテーションの  
 考えると、沢は、松本、田中君の内の一人である。  
 夜半に、テントを叩く雨の音に目をさます。ガクンとした。明日が今年のコー  
 スで一番のアルバイトなのに、雨とはい、勿論ザアと降りながら停滞の可能  
 性は、あるが、田中君の決意全の目標もあるから、少々の雨なら強行である。こ  
 のコースは、危険のないう所だけに、余程の悪天候でなければ、停滞をまじ出す  
 記には、いらない。雨は大した降りてなく、降ったりやんだり、とちうよりやん  
 づいて、時の方が長いようである。夜半に、テントに当る雨の音を、聞いている時  
 の、気持は、明るい。昼間とは違って、要い方ば、かりを考えてしまふ。小雨で、出  
 ズブヌレで、ふるえたら、3000米に近い尾根を歩く姿を、深刻に、思ひ浮かべていた。

8月10日

今日が、最大のコースなので、3時起き。雨は降っていないが、灰色の空  
 雲い舞である。朝食は、お茶漬けと味噌汁。  
 今日はどうせズブヌレと覚悟して、アンダー  
 シャツ・チョッキの上に、雨具をつけ、カッター  
 シャツは、ビニールで、フツと、ザクの中に、汗を  
 4時30分の出発。スズの小屋を過ぎて、樹  
 間の道を歩く。寒い。一番はじめの、少  
 なコブに上った所で、雨具のズボンをはき、  
 カッターを着込む。道は、大体、尾根位、



だが、風の当る時の寒さは、たまらな。とにかく5~6時同様に、  
 るより仕方がない。自分言ひきかせた。時々、尾根の右  
 側に、道がまくとまは。風が当らな。で、ホッとする。上りて  
 苦しいのと、寒さが、つらいので、こういつう時に、有り勝ち  
 な。もう、限か、と、度々思う。トップの田中君が、小り返え  
 っ。僕のバテ具合をみては、(と思うが)「休けいしましま  
 うの?」と声をかけてくれる時は、大抵「もう駄目  
 と、思っている時だ。風をさけての休みを、繰り返え  
 す。でも、若人達、は、寒さに強いので、田中君、次は、  
 は、カメウで、葉餅本幸、と、狙っていた。  
 この上りに、堪えられたのは、本幸に、田中君の名、トップ  
 の、ボリに、助けられたと、感謝している。反面、矢張り、おトシ  
 の、せいで、寒さに、弱くなっている。だから、上りに、汗を、  
 くらと、著している。その、寒さ、は、去年の、雄山と、この、ヤクシと、寒さ、  
 い、時には、なかつた。去年の、雄山と、この、ヤクシと、寒さ、  
 5時50分には、ピーク(間山、二五八五、二米)に立つ。天気がよければ、若し、  
 けれど、目の前の、葉餅を、みて、い、という、所、た、う、が、高度を、稼いだ、(今、秋の、テン  
 ト、場所が、二六〇米位)た、け、に、風、当り、は、き、つ、く、な、り、灰色の、空、の下、で、ワ、ク、シ、本、幸  
 の、尾根が、二六〇米位)た、け、に、風、当り、は、き、つ、く、な、り、灰色の、空、の下、で、ワ、ク、シ、本、幸  
 に、所、に、何、か、小屋、(では、ない、が)の、よう、な、物、が、見、え、る。今、あ、そ、こ、を、歩、き、い、て、い、る、ん、だ、  
 に、ら、い、い、の、に、と、何、時、も、小、び、は、同、ん、な、じ、よ、う、な、事、を、考、え、る、も、の、で、あ、る。





有峯湖(ダム)の人造湖 湖底に落ちた「オササギ」部落・有峯が沈んでいくも勿論見えていた。

若い人達は元気で葉師岳と叫びた木の標識の割れたのを土佐君が持ち、沢に居、田中君はカメラ、竹下、松本両君も加わって映るい声がひびいていった。とは言っても寒いのは僕だけではないので、記念撮影をすませるとそうくに出発。どんく下る。

9時20分にヤクシ小屋に着く。小屋で、ゆっくりにしたそうは学生の尻を叩い

寒さと上りの苦しさもこの辺まで来るともう、どうとでもなれと言った気持(と言った決して楽になった訳ではなし)だが、幸な事に雨は殆んど降らない。7時すぎに△(二八三三米)7時35分 北葉師岳 今朝から「あそこ迄行たらと散々眺めていた葉師の主峰に運ぶ一角に辿りついた訳である。『もう少しと安心感の芽は感んじられたが、とにかくピークに着く迄は黙々と歩くだけである。

8時35分 葉師頂上(二九二六米)。これで3回目。4回目は?と考えるゆとりはなかった。頂上のホコラの前の石の上に腰をおろす。『よく登ったなと登って来た道をふり返る元気も無く目の前の下山路と太郎の小屋、それに折立へのたゞ道を見おろして、あれが下山路と学生士人に言ったと思う。

てと思っている。トイレ拜借(誰か忘れた)で小屋でゆっくりにする事にする。全員に何かオズルと言った希望を聞く。竹下、田中、沢は石はウドン。松本君 ラーメン。土佐君 せんざり。ホットミルクは久保。小屋には甲子園での地元高校のテレビに熱中している客が数人いた。

10時に小焚、下りたけれど、アタカイ物がお腹に入、たし、上りの時の悲壮感、嘘の林と言った。やはり空は灰色、風は強いとあっては鼻歌まじりの下山と行程通り。

気分振れもあってこれからの下山路は長かった。森林限界に入り、風が当たらなくなると岩の多い足許の悪い道で、疲れたが急に出てくる。

11時にテント場、このテント場に何回泊ったか覚えていない。10回位か、それ以上か?。テントを張ってから昼飯。(何を食ったか記録を忘れた)演劇会を気にして、今日中に下したい田中君が独りで出発する。今日あれだけ上りてお世話になった。おれさ、言う暇も無く、小屋へのゆるい上りへと姿を消して行った。

ノ風が強いの、テントにザックを入れること、飛ばされそう、後で、舟車に、風の吹たる所に、テントを張ればよかったと、バクくすま音に悩まされながら帰った。

夕方はスーッ、クレハヤシ。8時15分にぬる。





8月11日

田部新台代のかけた  
看板



夜半に風の音がうるさくて目をさます。田中君が下山したので僕一人で別のテントでねたと思ふ。  
5時起き。朝日はホクテヒラフス。今日は急がらぬのでゆっくりと支度して7時15分の出発。緩い上りから平坦な道を下る。来年は此の道まで太郎から南へ行かぬかと考へかけろ。  
7時30分太郎小屋。巾のぬい暖かい道をぐぐり下る。右に昨日上った葉師本峯の尾根がガスで見えかくれる。左側には有峰湖が此時おり見おろせる。昨日田中君は疲れた足で此所を登ったと云う。有峰湖もよくみえた。下の画の所で沢口君のカメラに全員収まる。下山後、田中君のシヤシンをみると、ニッポンキスゲがまばらにシッターを切っている。目の止まる所は誰にもあるだけで色どりのない退屈な道で。少し休んで樹間のジグザグの下りに入る。逆行する多くの人とすれ違い、10時30分には折立の登山口に着く。他の客は殆んどなく(せはだつたのも)バスが通出るので来東。他の客は殆んどなく(せはだつたのも)



「お客さん 湯井の旅館は 何所ですか？」と運転手が聞いてくる。余中有峰ダムで一才止まったので11時30分頃バスは貴水館の入で止まってくれり。竹下君を交渉に行かせた後で入る。部屋は前の時(六車君リダーの時)と同じ。屋敷をたのむとソーメン(冷たいと思う)が出る。入浴、ビール、居居の前髪は体はとれた。午後土佐君はねていた。6時30分夕飯。一寸困るしい家賃の他にこの3組の客(2組)が居た。

テンテラ・トロロ・蛸ときゅうりの酢の物ヤクワボ付き) ロールケーキ・小鮎とワインおさしみ。みそ汁(具は魚)

御飯がなくなり他所のおヒツへ可成り遠征した。記録が厚くなったので貴水館18での記憶が消えている。可憐い子供が玄関先に居た事位しか覚えていない。六車君と初めて泊った時の印象が強すぎるのかも知れない。

8月12日

宿のマイクにバスで富山地鉄「有峰金山」へ。8時48分の電車。松本君が他の人の予約を使うかどうかと云っていたが、この駅では富山走しり切符を賣ってくれた。9時30分頃富山着。10時25分着。京都着。11時34分。皆と分かれて湖西線下山へ。今年も、田中君のおかげで三千米近くのことろを歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。



# 合宿の記録の終りに、

(89.6.18)

合宿のプランの中で、一番シンドイ薬師衆の所が眺望が一番いい所だ  
った。(今迄は何回か通った) だが、運わるくこの日が天候が悪くて一番  
苦しいだけのコースになってしまった。幸だった事は雨が殆んどふるな  
たのと、姉の田中君が年寄りをイタワツて歩いてくれたことであらう。  
記録の内にも書いたように思ふが、去年・今年と寒さはやられた事を僕  
自身としては反省しておかなければならぬ。年令的余裕で、やはり若  
い時のようにガク／＼ふるえたりでも頑張れた事が出来なくなっている事  
を考え直さなければならぬ。  
学生さんについては、まだく／＼回数が少なくて、不慣れな点が目降りる事  
があるのは否めぬが、その内にもまとまりのいいパートには育ちそうに  
楽しみにしている。

とちるに当って

平成元年 六月廿八日

まづ、字の汚なかつたことを おおびします。字が汚いのは 生れつきでも、小  
の記録は 何とかが丁寧な今迄は書いてきたんですが、今回は 完成が辱れてく  
づくすると、次の山行とふ／＼つかりそうになり、急いだ為には 要筆にブレキを  
かけなかつたので、い。  
合宿は、一番いい所を 風びフルエをう、ひたすら憶えろとソツた山行に  
なつたのと比べると、秋のゼミ後行は本当に山を楽しく、いゝ事すくめの山  
行になり、コントラストがば／＼きりと出てしまったようだ。

勿論、楽しい山行、スケッチの時間と対象が充分あるのが、いいに決まっ  
ているが、寒いく／＼ヤクシでの苦しさも山の醍醐味の一部分かも知れない。  
今迄のなれたメンバーにいる人達と、こうして山での 何日かを共にした沢  
が、また今迄と違つたスピードで色々の思ひ出がたまたま行くとすると、何とか  
老骨なうぬ老脚と老心臓に鞭うって、一回でも多く高の山での思い出と  
スケッチをためて行きたいとつく／＼思つていふ。